

2020年1月度キャンサーサポート特別講演トピックス

特別講演 形成外科 小林めぐみ先生
足底（掌蹠）の悪性黒色腫について

悪性黒色腫（メラノーマ）とは

メラノサイトが悪性化した腫瘍。皮膚癌の中で、基底細胞癌、有棘細胞癌の次に多い。

日本人の年間推定発生患者数は 1500-2000 人前後(人口 10 万人に約 1.5-2 人)であり、

欧米人の 10 万人に約 20-25 人に比べ少ないが、近年は高齢化に伴い増加傾向にある。

病型分類

①悪性黒子型：顔面に好発。前駆する黒色斑から発生するもの

②表在拡大型：あまり隆起せず表皮内を広がってゆくもの。体幹や四肢に多い。

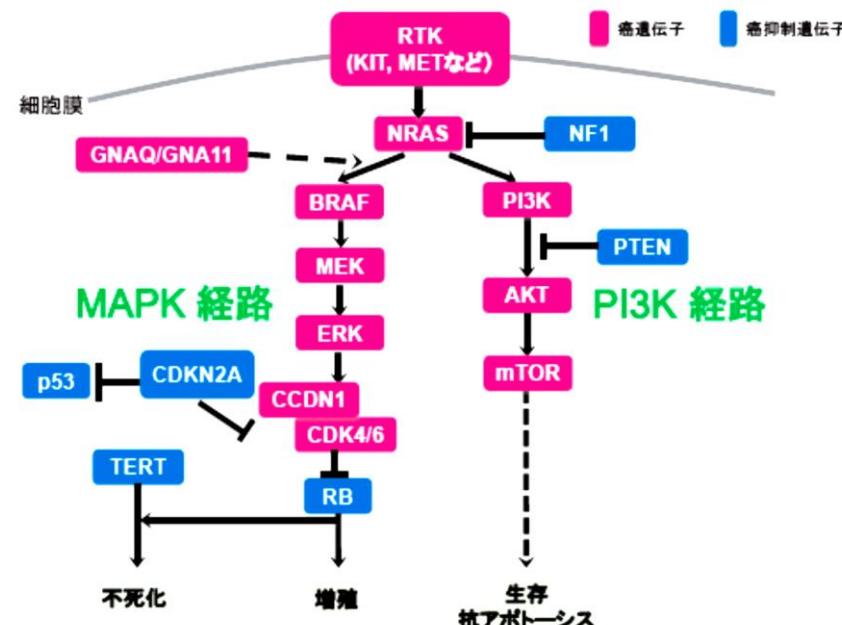
③結節型：黒色の腫瘍、潰瘍を形成するもの

④末端黒子型：指趾、爪、手掌足底の黒色斑が拡大するもの。

病型別発症頻度（人種間の差）は以下の通りである。

病型	日本人	白人	遺伝子変異/増幅
悪性黒子型	8%	5 %	BRAF(11%), NRAS(15%)
表在拡大型	17%	70%	BRAF(59%), NRAS(22%)
結節型	26%	15%	
末端黒子型	49%	10%	C-KIT(36%), BRAF(23%)

メラノーマにおける MAPK 経路と PI3K 経路



メラノーマ診療ガイドライン 2019 には紫外線暴露量(日光暴露の累積量 Cumulative Sun Damage; CSD)、部位、遺伝子異常に基づいたメラノーマの新しい分類が用いられている。

末端黒子型 (Acral lentiginous melanoma : ALM) とは

悪性黒色腫全体の 49.6%と本邦では約半数近くを占める。60 歳代以降に多く、足底・指趾爪部に好発する。ALM の累積生存率は結節型 (NM) について低い。ALM の表皮内病変である ALM in situ を的確に診断し治療することが重要である。

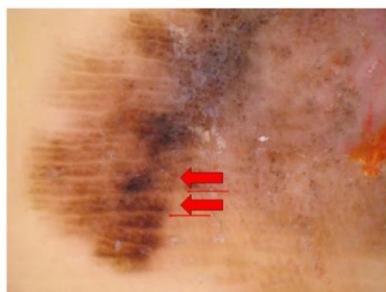
足底（掌蹠）には良性の色素性母斑も頻繁にみられるため、メラノーマの早期病変との鑑別が重要となる。ダーモスコピーは色素性皮膚病変の診断に有用だ

2020年1月度キャンサーボード特別講演トピックス

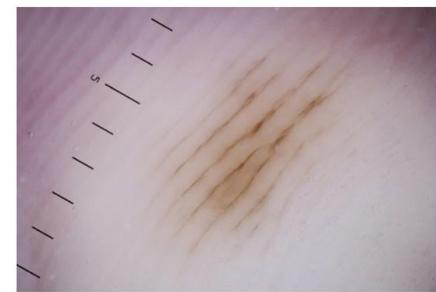
が、とくに掌蹠の色素性病変は独特なダーモスコピーソ見を呈し、診断確定に大いに役立つ。

ダーマスコピーは皮膚表面および表皮・真皮浅層までの色素性病変を、ダーモスコープと呼ばれる特殊な拡大鏡にゼリーをつけ、白色光を照射しながら10～20倍の拡大像を観察する診断法であり、本邦では2006年に保険適応となり、広く普及した。特にメラノーマ、色素性母斑、脂漏性角化腫、基底細胞癌、血管性病変の鑑別、診断に必須で、メラノーマ診療ガイドラインにおける早期診断の推奨度はAである。

ダーマスコピーの色素性病変の鑑別は、メラノーマを疑う皮丘平行パターン (PRP;parallel ridge pattern ;皮丘部に一致して見られる帶状の色素沈着)と良性の母斑を示す皮溝並行パターン(parallel furrow pattern ;皮溝に一致する平行線状の色素沈着)が重要である。



皮丘平行パターン:parallel ridge pattern



皮溝平行パターン:parallel furrow pattern

PRPの診断精度は真皮内悪性黒色腫で感度87%、特異度99%で、Melanoma in situでは感度86%、特異度99%と言われている。ALM in situの99%がダーモスコピーにてparallel ridge patternを呈する。

1994年にAtypical melanosis of the foot (AMF)という概念が提唱された。これは日本人の中高年の足に生じる一見メラノーマを疑わせる黒褐色斑で、臨床

的に径6mm以上の大型の病変で左右非対称、色調の濃淡、辺縁不正などメラノーマを示唆する所見を示すものである。組織学的に異型のメラノサイトを認めないため、良性の疾患と分類されていた。しかし、12年の経過でAMFからALM in situとなった症例が報告され、メラノーマの発生・伸展における最も初期の段階をみている可能性もあり、ALM in situに包含しても差し支えないものもあると報告され、AMFと診断された病変の多くがダーモスコピーにてPRPを呈することが明らかになってきた。AMFはメラノサイトの増数がごく軽微ではあるが、acral melanoma in situの特殊な表現型とみなされるようになった。melanoma in situ病変であっても、組織学的にメラノサイトの増数がほとんど目立たないことがありうるとされる。

臨床所見でメラノーマの可能性が高いにもかかわらず、メラノーマ陰性の病理報告書がきた場合には、直接担当の病理医と臨床写真やダーモスコピーソ見を示しながら協議を行い、必要に応じて部分生検の場合は再生検を、全切除生検の場合は皮膚病理専門家へのコンサルテーションを検討する。とりわけ、掌蹠と爪部in situ疑い病変においては、全切除生検であってもダーモスコピーソ見を含む臨床情報を加味して最終診断を検討する必要があり、注意が必要である。

さいごに

- ・掌蹠の悪性黒色腫の早期病変 (ALM in situ)の検出にはダーモスコピーでのparallel ridge patternの所見が役立つ
- ・ダーモスコピーでメラノーマを疑う所見があった場合、病理組織検査で良性と診断されても、melanoma in situの可能性が高く、直接病理の担当医と協議して再検討を行い、しばらく経過観察を行う必要がある。

2020年1月度キャンサーサーボード教育講演トピックス

教育講演 形成外科学 今川 孝太郎 先生

進行期悪性黒色腫に対するニボルマブ・イピリムマブ併用療法
Five-Year Survival with Combined Nivolumab and Ipilimumab in Advanced Melanoma N Engl J Med 2019; 381: 1535 - 46.

悪性黒色腫に対し、ダカルバジンを中心とする殺細胞性抗がん剤とインターフェロン療法がおこなわれてきたが、進行期悪性黒色腫に対する治療効果は満足できるものではなかった。2015年に免疫チェックポイント阻害薬のイピリムマブが、2017年にはニボルマブが米国で承認され、2018年からは日本でも承認となった。2018年には分子標的薬のダブラフェニブ、トラメチニブが承認され使用できるようになり、悪性黒色腫の薬物治療がパラダイムシフトした。

現在の進行期悪性黒色腫に対する主な薬物療法薬は以下の通りである。



今回、進行期悪性黒色腫におけるニボルマブとイピリムマブ併用による5年生存率が報告された。

背景:

進行期悪性黒色腫患者を対象にニボルマブ・イピリムマブ併用投与またはニボルマブ単独投与を行った患者群は、イピリムマブの単独投与を行った患者群よりも無増悪生存期間(PFS)と全生存期間(OS)が延長した試験はすでに報告されている。この試験の5年転帰を報告する。

方法:

未治療の進行期悪性黒色腫患者をニボルマブ(1 mg/kg 体重)+イピリムマブ(3 mg/kg)を3週毎に4回投与→ニボルマブ(3 mg/kg を2週ごと)を投与する群(NIVO+IPI群)、ニボルマブ(3 mg/kg を2週ごと)+プラセボを投与する群(NIVO群)、イピリムマブ(3 mg/kg を3週ごとに4回投与)+プラセボを投与する群(IPI群)に無作為に割り付けた。主要評価項目はPFSとOSの2つとし、3群を比較した。

結果:

最小追跡期間60ヵ月の時点で、全生存期間中央値は、NIVO+IPI群で60ヵ月超(中央値未到達)、NIV群で36.9ヵ月であったのに対し、IPI群では19.9ヵ月であった。5年全生存率は、NIVO+IPI群で52%、NIVO群で44%であったのに対し、IPI群は26%であった。NIVO+IPI、NIVO群では、いずれも治療中・治療後のQOL低下は認められず、新たな遅発性の毒性は認められなかった。

結論とまとめ:

NIVO+IPI、NIVOのレジメンはIPIに対しOS、PFSで優越性を示した。NIVO+IPIのレジメンは投与された約半数の被験者で長期奏効が認められ、5年でもOS中央値に達しない唯一のレジメンである。免疫チェックポイント阻害薬の特徴として、CR率が徐々に年々増えており、効果が長期にわたって継続する。NIV+IPIではgrade3以上の副作用が59%で認められた。しかしながら治療中、治療後の健康関連QOLの持続的な悪化は観察されなかった。近年の試験でPD-L1の発現はNIVOの効果発現に影響を与えていたが、本試験におけるNIVO+IPIでは発現による違いは認められなかった。